連載：原点

ほんの少しだけモヤモヤが残る授業が良い授業だと思うよ

天羽高等学校　山口 健太朗

私は講師として４年間，多様な学校で勤務し，様々な先生方や生徒たちと出会い，多くのことを教えてもらいました。私にとってこの４年間の経験は正規採用される前に必要な経験ばかりでした。そして，今年はご縁があり，正規採用していただき，今までと比べて求められることが非常に多くなり，改めて責任の大きさを実感しています。

さて，タイトルにある言葉ですが，私がこの４年間で多くのことを学ばせていただいた中でも特に印象に残った言葉であり，初めて教壇に立った年にかけていただいた言葉です。当時の私は，右も左も分からず，授業のいろはも何も知らないまま授業を行わなければならず，暗中模索の日々が続いていました。「給料をもらっている以上は”良い授業”を提供する責任がある。生徒全員が内容を完全に理解できなければダメだ」と考え，完璧な分かりやすい授業を行わなければならないと自分で自分を追い詰めていました。今思えば，初めての講師とは思えないほど生意気だったと思います。そして，考えれば考えるほど”良い授業”がよく分からなくなっていきました。そんなときに先の言葉をかけていただきました。この言葉のおかげで心の中にあった重荷がふっと軽くなりました。それ以降，確実に伝えたい内容を明確にした授業を展開することを念頭に置きながら，少しだけ考える隙を残すような授業を考えるようになりました。伝えたいことをあれもこれもと欲張るのはもう少し経験を積んでからにしようと思っています。

そんな私ですが，現在は初任校である天羽高等学校で，日々研鑽を重ねています。天羽高等学校の中には，様々な事情で，これまでの基礎・基本的な学習内容の定着が不十分である生徒たちが多くいます。そのため勉強に対する苦手意識が強く，その中でも数学は特に顕著です。少しでもモヤモヤが残ることは生徒の苦手意識に直接結びつきます。学校によって求められる授業が大きく異なり，私はここで”良い授業”をまた見失いそうになりました。しかし，授業の本質はそれまでの授業と大きく変わることはなく，基礎と応用の比率が少し異なり，誘導や解説が少しだけ丁寧になるだけだということを指導教員に教えていただきました。それからは，勤務校における生徒の実態に即したモヤモヤをどのように授業の中に組み込んでいくかを試行錯誤しています。これから先，どのような学校においても生徒の好奇心を刺激して”数学の愉しさ”を一人でも多くの生徒に伝えていけるようにしていきます。

最後に私ごとで恐縮ですが，この紙面をお借りしてこれまで講師時代に大変お世話になった先生方に感謝を申し上げたいと思います。